

教職課程履修者の教職回避に関する調査研究
－ 英文科の学生を対象に －

A pilot study on English majors' decision-making process to enter the teaching profession

佐々木 顕彦

SASAKI Akihiko

武庫川女子大学 学校教育センター年報

第4号 2019年

教職課程履修者の教職回避に関する調査研究
—英文科の学生を対象に—

A pilot study on English majors' decision-making process to enter the teaching profession

佐々木 顕彦*

SASAKI, Akihiko*

要旨

本研究では、教職課程を履修する英文科学生を対象に、課程履修を途中で断念したり、免許状を取得しても教職に就かないなどの「教職回避」を起こす要因を調べ、それらに対する方策について検討をおこなった。調査の結果、学生は1～2年次と3～4年次にかけて課程履修や教員就職への意欲が減退する傾向があり、低学年では教職課程の授業数の負担、高学年では教員採用試験や教師になることへの不安がその主な要因であることがわかった。こうした結果を踏まえ、本稿では、学生の教職回避を防ぐ方策として教職への動機づけを高める授業実践や声かけといった授業担当教員の積極的介入を提案している。

キーワード：大学生 教職離れ 英語 不安

1. はじめに

近年、教員志願者の減少が懸念されている。国公立大学教員養成系学部学科の志願倍率は5年以上減少を続けており（文部科学省, 2017a⁽¹⁾）、教職課程を持つ他大学でも課程履修者の減少や免許取得者の教員採用試験未受験率の増加が報告されている（e.g., 井沢, 2018⁽²⁾）。2018年度の公立学校教員採用試験においても、多くの自治体で志願者が減少しており、こうした現象に歯止めをかけるべく、高校生のうちから教員養成を始める所謂「青田買い」プログラムが始まるなど（教育新聞, 2018⁽³⁾）、大学生の「教職離れ」は社会的に深刻な問題となっている。

この現象は本学（武庫川女子大学）においても顕著に現れている。全学の教職課程履修者数は2015年から2年連続で減少し、さらには、教員採用試験を受験しない教員免許状取得者の割合が2016年から2017年にかけて10ポイント近く上昇した（佐々木, 2018⁽⁴⁾）。こうした状況は、「教員養成」を大学カリキュラムの特色の一つとして掲げ、過去多くの教員、保育士を輩出してきた本学にとっては大変深刻な問題である。全学の教職課程を統括する学校教育センターでも、教職課程中途辞退者や、教員免許状を取得しながら教職を目指さない学生が増加する傾向に強い懸念を抱いており、この原因究明と然るべき対応を喫緊の課題ととらえている。

著者が所属する英語文化学科（以降、英文科）でも、中学高校の英語教員を目指して毎年数十名の学生が教職課程を履修している。⁽⁵⁾ しかしながら、学年が上がるにつれて課程履修者の数は減少する傾向があり、たとえ課程を最後まで終えて免許を取得しても、実際に教職に就く学生は例年わずかである。⁽⁶⁾ 一般に、教員職は、育児休暇などが充実し出産後の職場復帰がしやすいなど、女性にとっては大変働きやすい職と言われている（e.g., 妹尾他, 2003⁽⁷⁾）。そのような理想的な職に就くために始めた教職課程を途中で辞退したり、苦勞と努力を重ねても免許状を取っても教職を目指さないという決断はいつどのような理由でなされるのであろうか。次章では、昨今の教員志願者減少の原因とされる事

* 英語キャリア・コミュニケーション学科准教授

象についてレビューしてみたい。

2. 教職課程履修者を取り巻く要因

一般に、教員志願者減少の理由としては、少子化による採用人数減少への懸念 (e.g., 山崎, 2015⁽⁸⁾), メディアでもしばしば報道される教師の長時間勤務や過度な部活動指導といった「学校のブラック体質」 (e.g., 内田, 2017⁽⁹⁾; 浦川, 2018⁽¹⁰⁾; 共同出版, 2017⁽¹¹⁾; 東洋経済新報社, 2017⁽¹²⁾; 若松, 2017⁽¹³⁾), また、就職状況の好転により多くの学生が民間企業への就職に流れていること (e.g., 井沢, 2017⁽¹⁴⁾) が挙げられている。これらについて簡単に論じてみたい。

まず、少子化の中で減少すると見られていた教員の需要は、これまで現職教員の年齢構成の影響もあり横ばい傾向にあったが、2017年度の公立学校教員採用者数は17年ぶりに減少に転じた (文部科学省, 2018a⁽¹⁵⁾)。少子化による教員需要の減少は今後ますます強まると予想されており、山崎 (2015⁽¹⁶⁾) は、「日本の将来推計人口」(国立社会保障・人口問題研究所, 2012⁽¹⁷⁾) を用いた研究で、小・中学校の教員需要は2019年にピークを迎え、2023年には戦後続いてきた大量採用が終わり、そして2030年代半ばには需要低迷期の底を迎えると予測している。こうしたことから、「少子化→採用人数減少→競争倍率増加」という図式が描かれ、教職志望学生の減少につながっていると考えられている。

2つ目の「学校のブラック体質」の要素としては、一日平均11時間を超える勤務時間や (文部科学省, 2017b⁽¹⁸⁾), ⁽¹⁹⁾ 土曜日曜祝日を問わずおこなわれる部活動の引率ならびに指導といった長時間労働が挙げられる (内田, 2017⁽²⁰⁾; 共同出版, 2017⁽²¹⁾)。また、社会や子どもの変化を背景にした教員業務の複雑化・多様化も問題になっている (文部科学省, 2006⁽²²⁾)。例えば、教師に対して目に見える教育成果を期待する社会的風潮や、家庭での教育力低下に伴い学校に過度の要求を突きつけてくる保護者の存在。そして、ますます深刻化・複雑化するいじめや不登校といった問題に加え、近年ではインターネットに関連した事件に子どもが巻き込まれるケースも多発している。こういった現状に翻弄される教員の姿がメディアで報道される昨今、学生が教職を回避したくなる気持ちも理解できる。

3つ目の民間企業への就職についてであるが、一般に、教員養成系以外の学部学科で教員を目指す学生の就職は、民間企業の就職状況に左右される傾向がある (井沢, 2018⁽²³⁾)。2008年のリーマンショック以降に起こった大学生の就職難が解消され、ここ数年は、円高や政府による積極的経済政策によって業績が好転した企業が大学生の採用を強化する傾向が強まっていると言われている (宇都宮, 2016⁽²⁴⁾)。事実、文部科学省 (2018b⁽²⁵⁾) の「平成29年度大学等卒業者の就職状況調査 (4月1日現在)」によると、平成30年3月に卒業した全国の大学生の就職率 (就職者数÷就職希望者数) は98% (前年比+0.4%) と過去最高を記録している。このような学生に有利な「売り手市場」が教員志願者の減少を招く一因であることは間違いないであろう。

これらの社会的な要因に加え、過去の研究では、大学の教職課程 (i.e., 教員養成教育) の内容や、学生の興味関心の変化といった個人的な要因も学生が教員就職を回避する原因として挙げられている (e.g., 久保, 2009⁽²⁶⁾; 中林他, 2016⁽²⁷⁾; 三上他, 2015⁽²⁸⁾)。こういった様々な要因の中で、本学学生の意思決定に最も影響を与えているものを抽出することは、ここ数年の教職回避傾向に歯止めをかける対策を講じるうえで重要と考えられる。

したがって、本研究では、大学生の「教職回避 (i.e., 教職課程履修途中辞退, 免許状取得者の教員就職回避)」について、本学英文科で中学校・高等学校教諭 (英語) 一種免許状課程を履修する学生を対象に以下のことを調査・検討する。

- (1) 学生が教職を回避する時期はいつか。
- (2) 学生が教職を回避する要因は何か。
- (3) 学生の教職回避を防ぐにはどのような方策が効果的か。

なお、本研究は、英文科学生という限定された集団を対象におこなう小規模な予備的調査であり、ここで取られた研究手続きの検討や修正を後の調査に役立てることも目的とする。

3. 方法

3.1 対象者

本研究では、本学英文科の教職課程履修者1～4年生（計107名）を対象とした。研究倫理の観点から、研究の目的、得られた情報は研究以外の目的に使用しないこと、結果を公表する場合は個人を特定できないように配慮することなどを事前に説明したうえで、参加は学生の自由意志とした。その結果、合計96名（1年生25名、2年生36名、3年生17名、4年生18名）の参加者を得た。⁽²⁹⁾

3.2 データ収集

データ収集は6月から7月にかけて質問紙を、また同年9月にインタビューを用いておこなった。学生の教職回避要因を調べる質問紙作成に際しては、上記のレビューをもとに、「社会的要因」（i.e., 少子化による採用人数減、学校のブラック体質、「売り手市場」の就職環境）、「教職課程の要因」、そして「個人要因」（興味関心の変化）という3つの枠組みを用いた。その結果、質問紙の構成と質問項目は以下のようになった。

- ①所属と学年（「無記名」でよいことを明記）
- ②今どのくらい教職に就きたいと思っているか（5件法）
- ③そう思い始めた理由として以下の項目はどのくらい当てはまるか（4件法+自由記述）
 - a. 少子化が進んでいる
 - b. 教員採用人数が減っている
 - c. 一般就職のほうが有利
 - d. 教職のブラックなイメージ
 - e. 教職課程の大変さ（例：単位を取るのが大変）
 - f. 教職課程の授業や教員の問題
 - g. 説明会や提出物の大変さ（例：厳格化⁽³⁰⁾）
 - h. 教員採用試験の準備や受験が大変
 - i. 大学や英文科の教職支援が不十分
 - j. 個人的な問題（例：興味関心が変わった、教職に興味がなくなった）
- ④その他の理由（自由記述）

②「今どのくらい教職に就きたいと思っているか」について5件法の Likert Scale（5：とても思っている—1：まったく思っていない）で回答を求め、「1：まったく思っていない—3：迷っている」を選んだ参加者（i.e., 教職回避傾向を持つ参加者）に③以降の解答を求めた。

③は教員就職を回避する理由を尋ねる設問で、a-d が（1）社会的要因、e-i が（2）教職課程の要因、j が（3）個人的な要因（興味関心の変化）をそれぞれ調べる項目であった。すべて4件法の Likert

Scale（4：とても当てはまる—1：まったく当てはまらない）で回答を求めると同時に、各項目について述べたいことがあれば自由に記入できるよう自由記述の欄も設けた。なお、「その他の理由」がある場合に備え、④の自由記述欄も設けた。

インタビューは質問紙調査に参加した4年生から無作為に抽出した数名に対して半構造化インタビューの形式でおこなった。⁽³¹⁾ 半構造化インタビューは、事前に用意した質問項目を尋ねながら、被面接者の回答に応じて質問の内容を変化させていく面接法である。被面接者に自由に語ってもらうことによって、量的分析では得られない情報が引き出せる利点がある(西條, 2007⁽³²⁾; 竹内・水本, 2014⁽³³⁾)。本研究では、質問紙調査で判明した学生の教職回避要因や、学生の教職離れに歯止めをかける方法について、4年生自身の教職課程での経験をもとに意見や感想を自由に語ってもらった。

3.3 データ分析

本研究では、質問紙調査とインタビュー調査から得られたデータを量的・質的に分析した。まず、質問紙の②「今どのくらい教職に就きたいと思っているか」と③「教員就職を回避する（躊躇する）理由（a-j の10項目）」を計量的に分析し、教職を回避する時期やその主な理由を記述した。次に、質問紙の自由記述で得られたテキスト・データをKJ法を参考にして質的に分析し、⁽³⁴⁾ ③の項目調査では現れなかった教職回避要因を抽出。それらの要因を「教職課程履修を途中で辞退する理由」と「教員就職を回避する理由」に分け、さらに、インタビュー・データをもとにそれぞれ主要なものを絞り込んだ。最後に、これらの結果に基づき、教職回避を防ぐ方策を検討した。

4. 結果と考察

4.1 教職を回避する時期

質問紙項目②「今どのくらい教職に就きたいと思っているか」の結果を図1に示す。提示された数値は各学年の割合で、（ ）内は実際の人数である。

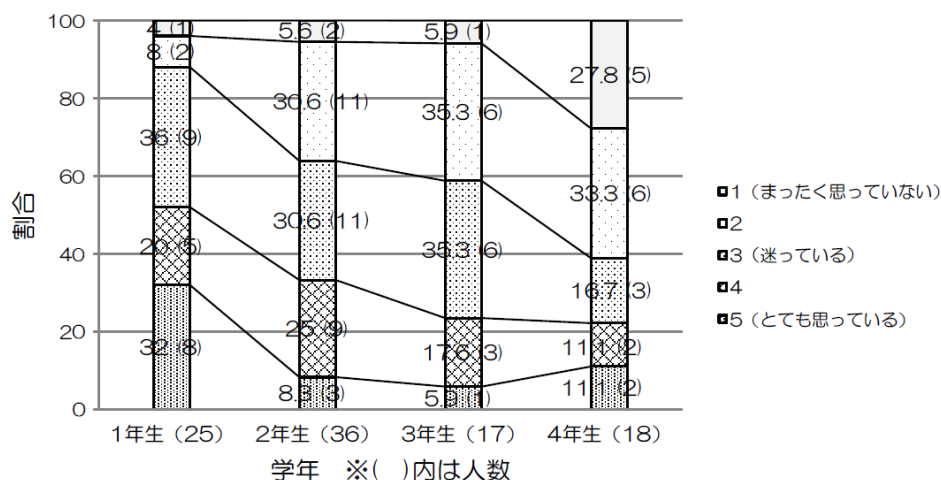


図1. 教職に就きたいと思うか

「5」と「4」を合わせた「思っている」学生の割合は、1年生では52%（32% + 20%）であったが、2年生で33.3%と激減し（8.3% + 25%）、その後、3年生から4年生にかけて23.5%（5.9% + 17.6%）、22.2%（11.1% + 11.1%）と下がり続けていた。一方、「1」と「2」を合わせた「思ってい

ない」学生の割合は、1年生ではわずか12%（4%+8%）であったが、2年生で36.2%（5.6%+30.6%）に急増。その後、3年生で41.2%（5.9%+35.3%）と微増し、4年生では61.1%（27.8%+33.3%）と約1.5倍に増えていた。

教員志望学生の意識や行動の変化を調べた過去の実証研究では、学生の教職志望度が1年生から2年生にかけて減退することや、教職を志望する学生とあきらめる学生の分化は3年次に現れることが報告されている（e.g., 今津, 1979⁽³⁵⁾; 姫野, 2013⁽³⁶⁾）。本研究でも、1年次から2年次、3年次から4年次にかけてそれぞれ教職離れが起こる同様の傾向が確認された。以下、教職を回避する理由を、1・2年生と3・4年生に分けて確認する。

4.2 教職を回避する要因

質問紙項目③「教員就職を回避する（躊躇する）理由」の10項目の結果を図2に示す。ここでの数値は4件法の平均値で、各項目につき学年別と合計の値をグラフ化した。なお、3.2でも記した通り、質問項目②で教職回避傾向を示した参加者（i.e., 「1：まったく思っていない—3：迷っている」を選んだ学生）だけを対象としたため、1年生が12名、2年生24名、3年生13名、4年生14名の計63名のデータとなっている。

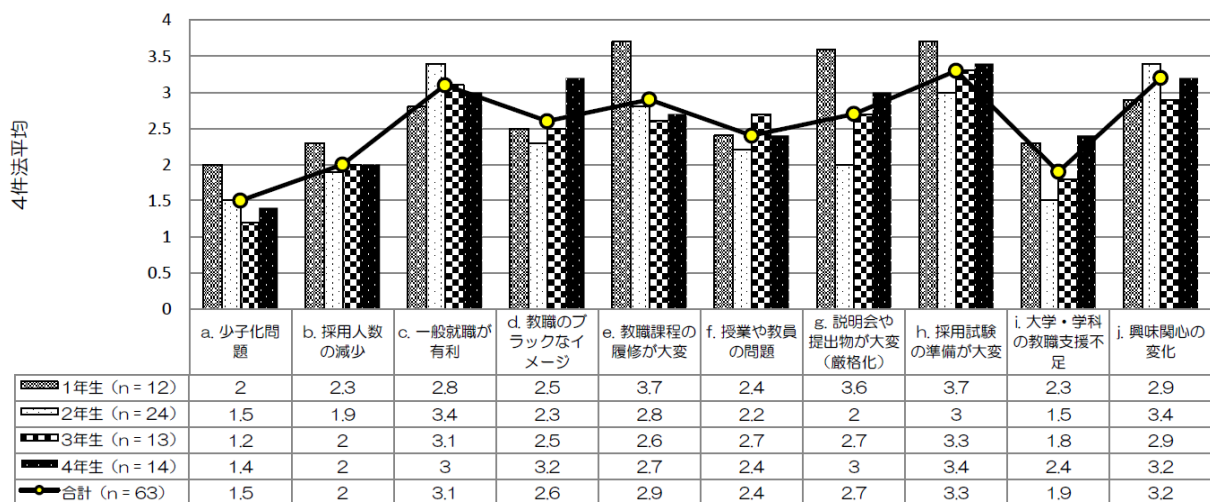


図2. 教員就職を回避する（躊躇する）理由

1・2年生

平均値が3.0を超えた項目は、1年生で「e. 教職課程の大変さ（例：単位を取るのが大変）」（3.7）、「g. 説明会や提出物の大変さ（例：厳格化）」（3.6）、「h. 教員採用試験の準備や受験が大変」（3.7）、2年生で「c. 一般就職が有利」（3.4）と「h. 教員採用試験の準備が大変」（3.0）、「j. 興味関心の変化」（3.4）であった。1年生のe. とg. については、大学の授業に慣れていない新入生が英文科のカリキュラムに加えて履修する教職課程に苦闘する状況を反映した結果と考えられる。実際、1年生がこれらの項目の自由記述欄に書いたコメントには「土曜日の授業がしんどい」、「授業が多くて課題をする時間がない」といった時間割や授業数に対する不満や、「出席する説明会の連絡が（その都度）欲しい」など「厳格化ルール」への抵触を恐れながら課程履修していることを示唆するものが見られた。また、2年次以降はどちらの項目も0.5ポイント以上低くなっていることから、これらは1年生特有の問題と考えられる。

2年生の「c. 一般就職が有利」と「j. 興味関心の変化」における高い平均値は、彼女らのアメリカ留学で起こった心的変化や新たな職業アイデンティティ形成が原因と考えられる。⁽³⁷⁾ 留学中におこなわれたワシントン州での企業研修などを経て一般企業への興味関心が高まり、現在の日本の「売り手市場」の就職状況と相まって「一般就職の方が有利」という考えに至っている可能性がある。2年生の自由記述欄には、「やりたいことが複数あって決められていない」、「他の夢への興味が強くなった」など、他の職種に目を向ける回答が5件以上見られ、こういった記述は1年生の質問紙には見られなかったことから、他職種への興味は2年生頃から始まると考えられる。

ちなみに、両学年で高い数値が見られた「h. 教員採用試験の準備が大変」は、他の学年でも同様の結果が見られる。やはり、学生にとって「試験」へのプレッシャーは常に高く、特に大学入試を終えたばかりで受験勉強の辛さを覚えている1年生にとってはより深刻な問題かもしれない。

3・4年生

3年生では、「c. 一般就職が有利」(3.1)と「h. 教員採用試験の準備や受験が大変」(3.3)の2項目で平均値3.0を超えていた。これらの数値は、3年生になり自身の進路について真剣に考え始めた学生が「就きたいけれども試験が大変な教職」と『売り手市場』で学生有利な一般就職の間で葛藤する姿を表していると思われる。3年生の自由記述欄には1・2年次には見られなかった「(教員採用試験に)本当に合格できるのか」、「非常勤になるしかないのは嫌」など、就職活動を教職一本に絞ることへの不安や、「(並行して)一般就職もこなして. . .」と教職と一般就職の同時進行を模索する回答。一方、「一般就職との両立も考えたが. . .自身のキャパシティをオーバーしてしまうと考えたため一般就職にしぼることに」と教職をあきらめようとする回答も見られた。

4年生では、上記の「c. 一般就職が有利」(3.0)と「h. 教員採用試験の準備や受験が大変」(3.4)に加え、「d. 教職のブラックなイメージ」(3.2)、「g. 説明会や提出物の大変さ(例:厳格化)」(3.0)、「j. 興味関心の変化」(3.2)が高い数値を示している。d.の自由記述欄には「5年、10年と続けていく中で自身の生活との両立を考えた際、続けていけるイメージがわかなくなりました」という回答があった。「教職のブラックなイメージ」はメディアで頻りに報道されているが、1～3年次の関心はさほど高くなく、4年次の就職活動時期、つまり真剣に教員就職を考えたときに初めて「長時間労働」や「部活動指導」といった問題が現実味を帯びてくるのかもしれない。j.も、進路を模索する中で自分が本当にやりたいこと(i.e., 教職以外の仕事)が見つかったという4年生の姿を反映しているものと思われる。g.は、実習説明会への出席や実習ノート提出などの煩瑣な手続きをしていたことが原因と考えられる。

全体

1～4年生全体の平均値が3.0を超えたのは、「c. 一般就職が有利」、「h. 教員採用試験の準備や受験が大変」、「j. 興味関心の変化」であった。これらの項目は4年間の教職課程履修期間を通して教職を回避する主な要因になっていると考えられる。一方、「a. 少子化問題」や「b. 採用人数の減少」といった社会的要因、また「i. 大学・学科の教職支援不足」といった学校側の問題は平均値が2.0以下であり、これらは学生の教職回避には大きな影響を与えていなかったことがわかった。

4.3 教職を回避するその他の要因

質問紙項目③ (a-j. の 10 項目) 以外の要因を解明するため、質問紙の自由記述欄に書かれた回答を KJ 法を参考にして質的に分析した。まず、自由記述データを切片化して 121 個の切片を抽出した。次に a-j. の 10 項目以外の要因と考えられる 24 個の切片を特定し、それらを 3 つのカテゴリーに分類した。結果を表 1 に示す。

表 1 教職を回避する(躊躇する)その他の理由(自由記述)

カテゴリー	サブカテゴリー	記述例
その他 (24)	教師になる不安・自信のなさ (15)	自分は教師に向いていない／(教師になる) 自信がない／塾講師のバイトをしていて教師になれるか不安になった／自分が本当に教師になれるのか不安／受け身な自分が前に立って授業できるか不安／(教職課程で) やればやるほど不安になった／先生の厳しい言葉で自信がなくなった／教壇に立つことへの不安／生徒の人生に関わる不安／いろいろな不安が自信喪失につながった／自分に(教師が) できるかなと思った／自分が教師に合っているのかわからない
	英語を教える不安・自信のなさ (6)	英語が苦手／英語を教える自信がない／英語教師としての責任が果たせるか不安／授業で実践的な経験(模擬授業など) をする機会がほとんどなかったので自信が持てなくなった
	もともと教職に就く意志がない (3)	もともと教師になりたいとはあまり思わなかった／教師とはどんな仕事か知りたかったが 3 年でわかったのもういい

() 内は切片の数

3 つのカテゴリーは【教師になる不安・自信のなさ】、【英語を教える不安・自信のなさ】、【もともと教職に就く意志がない】と名付けた。まず【教師になる不安・自信のなさ】には「自分は教師に向いていない」、「教師になる自信がない」といった教師としての自信のなさや、「教師になれるか不安」、「前に立って授業できるか不安」、「教壇に立つことへの不安」、「生徒の人生に関わる不安」など、教師として仕事をする不安が集約された。次に、【英語を教える不安・自信のなさ】には、「英語が苦手」、「英語で授業ができない」、「英語教師としての責任が果たせるか不安」といった英語教師としての不安や自信のなさが含まれた。

これら 2 つのカテゴリーを「不安・自信のなさ」でまとめると 21 個の切片数となり、学生の教職回避に大きな影響を持つ要因と考えられる。また、これらの記述が学年が上がるにつれて多く見られたことや、「(教職課程で) やればやるほど不安になった」、「先生の厳しい言葉で自信がなくなった」、「授業で実践的な経験(模擬授業など) をする機会がほとんどなかったので自信が持てなくなった」という記述から、学生の不安や自信のなさは必ずしも最初からあったものではなく、課程履修の授業を通して蓄積した可能性がある。

そこで、「授業」というキーワードが、どのような文脈で現れていたのかを調べるため、テキストマイニング用の分析ソフトウェアである KH Coder を利用して⁽³⁸⁾ KWIC コンコーダンス分析をおこなった。⁽³⁹⁾ その結果、「授業」を含む 21 件の切片のうち、「授業で指導案の書き方を十分に学ばなかった」、「英語での授業を... どのように行うのか授業を通してあまり学んでいなかった(ため教育実習で困った)」といった「授業内容・方法」に関するエピソードが 12 件と半数以上を占め、また、「先生のネガティブな言葉」、「教師にならないなら教職課程を辞めなさいと言われ...」など、「授業担当教員の言動」に関するものが 4 件確認された。質問紙項目③「f. 教職課程の授業や教員の問題」の数値はさほど高くなかったが(平均 2.4)、これらの問題は教職を回避する要因として浮かび上がった学生の「不安・自信のなさ」を引き起こす 1 次的要因になっていた可能性がある。

最後に、【もともと教職に就く意志がない】のカテゴリーに3つの回答が含まれた。「教員志望ではないが免許だけは取っておこう」と考えている学生が英文科にもいることが示唆された。

これまでの質問紙調査の分析で得られた結果は以下のようにまとめられる。

- (1) 学生は1～2年次ならびに3～4年次にかけて教職を回避する傾向がある。
- (2) 学生が教職を回避する理由として、以下の要因が考えられる。
 - ・教職課程の授業数や、説明会への出席（厳格化）に対する心的負担（1年次）。
 - ・自身の興味や価値観の変化に伴う他職種への関心（2年次以降）。
 - ・就職への不安から、ハードルの高い教員採用試験をあきらめ、学生有利の一般就職に流れる傾向（3年次）。
 - ・教職のブラックなイメージや、他職種への興味関心を持つこと（4年次）。
 - ・教職課程の授業を通して、教師になる不安を抱えたり、英語を教える自信をなくしていること（上級年次）。
 - ・「少子化問題」、「採用人数減少」といった社会的問題や「大学の支援不足」の影響は比較的少ない。

4.4 インタビュー

インタビュー調査に参加した4年生に質問紙調査の結果（i.e., 教職回避の時期と要因）を提示したところ、彼女らが経験した現実とほぼ一致するという発言を得ることができた。次に、3.3で述べたように、これらの教職回避の要因を「教職課程履修を途中で辞退する理由」と「教員就職を回避する理由」に分けて絞り込むためのインタビューをおこなった。

教職課程履修を途中で辞退する時期と理由

インタビューでは、まず、英文科学生が教職課程を途中で辞退する時期やその主な理由について、彼女らの経験をもとに自由に語ってもらった。以下、得られたインタビュー・データを書き起こしたものの一部である。

1年前期から授業が多くて、土曜日と月曜日にあったりして、他の子に比べてなんでこんなに多いんだろって。しんどいから辞めるとか、特に後期からお金を払わないといけないからその前に辞めてしまうとか。あと、2年になっても、留学帰ってきて授業いっぱい詰まって、土曜日も2・3・4限連続で授業があつて。そういう子は最初から免許だけっていう子で、2年でも結構辞めた子がいたと思います。

最初は... やっぱり授業が土曜日とか月曜日とかに来て... 授業が多すぎてしんどいって。何となくで教職取ってて辞めるっていう感じ。

3年のとき、一般就職と教育実習がかぶって、就職活動ができないことが不安で辞める子がいました。

これらのコメントから、教職課程を途中で辞退する理由としては、「教職課程授業数の負担（1・2年次）」と「次年度に迫った就職への不安（3年次）」が主な要因になっていた可能性がうかがえる。4.2で考察したように、下級生にとっては、1・2年次の基礎教育・専門教育科目に加えて履修する教職課程科目の授業数の負担が、また、上級生にとっては、自身の進路を教職一本に絞ることへの不安が、それぞれ教職回避につながるケースが多いと思われる。

なお、これらのコメントに現れた「最初から免許だけ」や「何となく教職取って」という学生は、本質問紙調査の自由記述から抽出された【もともと教職に就く意志がない】というカテゴリー、つまり「教員志望ではないが免許だけは取っておこう」という学生にあたる。4年生に対して、こういった「免許だけ」を目指す課程履修者についてコメントを求めたところ、「途中で辞めた子はそういう子が多かったと思います。」「『何となく』っていう人がすぐ辞めるイメージ」という回答が得られた。これらのデータだけでは断定できないが、「教員志望ではないが免許だけは取っておこう」という気持ちで教職課程履修を始めた学生は、授業の負担や進路選択の不安に直面すると、比較的すぐに課程履修の継続をあきらめる傾向があるのかもしれない。

教員就職を回避する時期と理由

次に、教員免許取得者が教員就職回避を決める時期とその理由について尋ねた。インタビューを受けた学生は全員、教員ではなく一般企業への就職を選択しており、自分自身の経験をもとに語ってくれた。彼女らのコメントに共通して聞かれたのは「不安」という言葉であった。

授業で「コミュニケーション能力がないと教師は無理」とかネガティブなことを言われると、自分はダメかなと思って。教師として勤まらないかなと思って。実習に行くのも不安になりました。

3年で「ここまで取ったから」で続けたけど、実習に行く前にすごく不安で。模擬授業したときも、悪いところだけ指摘されて。「どう改善したらいいですか」って聞いたら「自分で考えなさい」って言われて。他に模擬授業する機会がなくて、ほんとに自分が教えられるのかどうかって。あと、部活の指導がしんどいとか休みがないとか聞いて怖くなったのもあって。

*教師という責任を考えたとき、生徒の人生を狂わせてしまうかもしれないという不安とか...
生徒の素直さや、大切な時期に関わることへの不安が大きくなりました。*

これらのコメントを通して、学生は「教師として勤まらないかもしれない」、「うまく教えられないかもしれない」、「部活動指導などのハードな業務に耐えられないかもしれない」、「生徒の人生に対して責任ある仕事ができないかもしれない」など、たくさんの不安を持っていたことがわかる。また、「部活の指導がしんどい」といった「教職のブラックなイメージ」も不安につながっている。教師という職業に対してこれだけ様々な不安を、しかも卒業後の進路決定が迫られる上級生学年で抱えているのは、教員就職を躊躇し回避するのもやむを得ないであろう。

これらのコメントで注目すべきは、彼女らの不安が授業の中で生じていた点である。担当教員のネガティブな発言や、模擬授業での指導、そして「教職のブラックなイメージ」を伝える発言が原因で

不安を掻き立てられている。質問紙調査の自由記述の分析でも抽出された教職課程の「授業内容・方法」や「授業担当教員の言動」の問題をインタビューを受けた4年生も感じていたことがわかる。

教職課程中途辞退や教員就職回避に歯止めをかける方法

最後に、上記のような教職離れに歯止めをかける方法について自由に意見を求めた。学生からは「できないのはわかっているけど、授業（数）をもっと減らす」、「可能なら（4回生で一般就職活動も進められるように）3回生で教育実習に行けるようにする」といった実現化することが難しい意見も聞かれたが、その他の意見は授業改善に関するものであった。

みんな「(教師に) なりたい」とは思ってるけど、一方で「なれるんかな」って。「自信がない」、「不安」と思いながらがんばって受けてるわけで。それなのに、厳しいこと言われたらすごく怖くなりますよね。逆に褒めてもらったり、教師って素晴らしい仕事だよって言われたらかなり違うと思います。

教師になれるか不安で迷いながら受けている人が多いので、授業で先生が応援してくれたり、模擬授業をもっとやってサポートしてほしいです。

講義中、教員を目指す以外の学生に対して先生の厳しい言葉が原因で辞めた人もいます。そういうのがなくなったらいいかもしれない。

これらのコメントは、上にも述べた学生の「不安」のもととなった「授業内容・方法」と「授業担当教員の言動」への改善要望であるが、視点を変えれば、授業や担当教員に対する依存度や期待度の高さが表れたものと言えるであろう。

4.5 教職回避を防ぐ方策

インタビュー・データの分析結果をもとに、4.3 でまとめた「(2) 学生が教職を回避する理由」から「教職の授業数に対する負担（1・2年次）」と「就職への不安（3年次以降）」、「教師になる不安（3年次以降）」の3つを主な要因として取り上げ、それぞれに対応する方策について検討してみたい。

まず、下級生の負担になっている授業数であるが、これらを減ずることは教育職員免許法上不可能である。せいぜい、月曜日と土曜日に分かれている教職課程の授業をどちらかの曜日にまとめるといった時間割上の工夫をすることが考えられるが、様々な制約条件の中で作成される大学の時間割を教職課程履修者の都合に合わせて作ることは現実的ではない。

また、上級生が抱く就職への不安、中でも、難易度の高い教員採用試験一本に絞って就職活動することへの不安については、すでに大学から「教員・保育士採用選考試験対策特別講座」や東京アカデミーによる「教員採用試験対策『一般知能』『傾向と対策』」といった支援サービスが提供されており、実際にそれらに参加した学生は高い確率で教員採用試験に合格している。本研究の対象となった英文科の学生は、過去、こうした講座や対策授業への参加率が低く、中にはこれらの存在すら知らないという者もいた。今後、英文科教職支援委員会⁽⁴⁰⁾ がこれらの支援プログラムを効率的に広報して学生の参加を促したり、委員会メンバーが積極的に受験指導に関わるなど、採用試験受験への不安を少しでも軽減していく必要がある。

なお、本研究の調査でその存在が明らかとなった「教員志望ではないが免許だけは取っておこう」という学生については、このような方策の効果は期待できないかもしれない。というのも、このカテゴリーの学生は最初から教員になる意志がないだけでなく、4.4で考察したように、もし彼女らが授業の負担で簡単に課程履修を断念する傾向を持っているとすれば、特別講座や対策授業への参加奨励はさらなる負担にしかならないからである。むしろ、今ここで検討する「学生の教職回避を防ぐ方策」の対象になるべきは、「教師になる不安」を抱えている学生、つまり、「教師になりたいけど、自分が教師としてやっていけるのか不安」、「きちんと英語が教えられるのか不安」という学生であり、彼女らの「不安」を和らげ、さらには「自信」をもって教員就職を目指すよう導く方策が必要であろう。

そこで本研究では、実践的な授業を増やしたり、学生に対してポジティブな声かけをするといった、教職課程授業担当教員による積極的な介入を提案したい。質問紙の自由記述とインタビューからは、「指導案の書き方」や「英語での授業」、「模擬授業」といった実践的な経験を十分にできなかったことが英語を教えることへの不安に、また、教員の「ネガティブな言葉」や「厳しい言葉」が教職に就く自信喪失にそれぞれつながっていたことが示唆された。これらの問題の解決には、4年生がインタビューで述べたように、「模擬授業をもっとやってサポート」し「授業で先生が応援」すること、さらに、教職のブラックなイメージではなく、その魅力を伝えることが有効であると考えられる。また、そういったポジティブな声かけが1年次からおこなわれれば、授業数に負担を感じる下級生も教職に向けて動機づけが高まり、課程履修を継続できる学生が少しでも増えるかもしれない。

もちろん、叱咤激励的な指導、つまり、叱り励ますことで学生を奮い立たせる指導が有効な場合もある。質問紙の自由記述で見られた「教師にならないなら教職課程を辞めなさい」という言葉や、インタビューで聞かれた「コミュニケーション能力がないと教師は無理」、「(模擬授業の改善点は)自分で考えなさい」といった言葉は、学生に克服すべき課題を突きつけることによって反発心を引き出し、さらなる成長を促す意図で使われたと推測されるが、こういった指導は「絶対に教職に就く」という強い意志を持っている学生には有効であろう。しかしながら、本研究の対象となった英文科の学生には、『(教師に) になりたい』とは思っているけど、一方で『なれるのかな』と思いながら、また「教師になれるか不安」と迷いながら教職課程を履修している者が多いことがインタビュー・データからわかった。そうした学生に対しては、「叱咤」よりもむしろ、「励ます」、「褒める」ことが彼女らの不安を減じ、教師になる自信を高める効果的な指導方法になる可能性がある。

最後に、「褒める」ことの重要性を示すインタビュー・データを示す。これは、教育実習先の担当教諭に褒められたことで、当初考えていた一般就職をやめ、あらためて教員就職を目指すことにした学生のコメントである。

最初(教師に) なりたかったけど、やってるうちに無理かなと思ってきて。... 演習で、模擬授業やったときに、はじめてだったのにいっぱい辛辣なこと言われて。ほとんど褒めてもらえなくて。自分はあるかと思込んで。でも、実習に行ったらそんなことなかったです。模擬授業でダメ出しされたことが逆にうまくいったり。先生にも褒められたし。一般就職しようと思っていたのですが、教育実習に行って意志が変わりました。

5. おわりに

冒頭にも述べたように、現在の社会は少子化による教員採用人数減、学生有利の就職状況、学校のブラック・イメージなど、学生が教職を回避する理由で溢れている。少しでも多くの教員を輩出した

いと考える大学関係者にとっては深刻な状況であるが、少子化も社会の景気も大学教員がコントロールできる問題ではない。だが、マスコミを通して伝えられる学校のブラック・イメージについては、教職課程授業担当教員がそれらを打ち消すに足りる「教職の魅力」を伝えることで克服できる可能性がある。さらに、より多い実践的授業の機会や、学生の自信を高める声かけが、「教師になりたいけどなれるかどうか不安」と迷っている学生の自己効力感を高め、延いては教員就職への動機づけを高めることにつながるかもしれない。これらの方策の可能性を、本研究は質問紙ならびにインタビュー調査の分析結果をもとに提案した。

ただし、本研究は、ある年度の本学英文科学生という限定されたサンプルに対しておこなわれた予備的調査であり、ここで得られた結論やそこから構築した提案は必ずしも一般化されるものではない。今後、より大きな集団の教職課程履修者を対象とした調査が求められる。

謝辞

本研究に参加してくださった英文科学生の皆様に、心より感謝の意を表します。

注・引用文献

- (1) 文部科学省『国立教員養成大学・学部関係基礎資料集』文部科学省, 2017a
- (2) 井沢秀「教員就職者が多い大学トップ 200 ランキング-1位は大阪教育大, 2位愛知教育大, 4位文教大」『東洋経済オンライン』2018, Retrieved from <https://toyokeizai.net/articles/-/205156?page=2>
- (3) 教育新聞『奈良県教委が青田買い策 6年で高校生を教員養成』2018, Retrieved from https://www.kyobun.co.jp/news/20180622_04/
- (4) 佐々木顕彦「平成29年度卒業学年アンケート結果報告(第6セクター報告)」『平成30年度第7回学校教育センター常任委員会』2018
- (5) 2015年度から2018年度の英文科学生の教職課程履修登録者の平均人数は29名であった。
- (6) 2014年度から2017年度の英文科卒教員就職者の平均人数は7名であった(公・私立, 専任・常勤・非常勤含む)。
- (7) 妹尾渉・松繁寿和・梅崎修「公務員および教員の男女間賃金格差—大卒者アンケート調査から」『大阪大学経済学』53, 2003, pp. 96-108
- (8) 山崎博敏「教員需要の推計から考える要請システムの課題」『Between 2015, 2・3月号』ベネッセ, 2015, pp. 10-11
- (9) 内田良『ブラック部活動: 子どもと先生の苦しみに向き合う』東洋館出版社, 2017
- (10) 浦川麻緒里「小学校教師の長時間労働の要因とその軽減方略に関する一考察—教師の職務に対する認知及び人間関係に着目して—」『純心人文研究』24, 2018, pp. 203-214
- (11) 共同出版「教職はブラックか」『教職課程』43(15), 2017, pp. 3-87
- (12) 東洋経済新報社「学校が壊れる」『東洋経済 2017年9月号』2017
- (13) 若松養亮「教員養成学部4年次生における教職の選択・棄却の意思決定」『滋賀大学教育学部紀要』67, 2017, pp. 219-229
- (14) 井沢秀「教員就職者が多い大学トップ 200 ランキング—「教育学部」は地元志向の強い学生の受け皿だ」『東洋経済オンライン』2017, Retrieved from <https://toyokeizai.net/articles/-/153493>
- (15) 文部科学省『平成29年度公立学校教員採用選考試験の実施状況について』文部科学省, 2018a
- (16) 前掲
- (17) 国立社会保障・人口問題研究所『日本の将来推計人口—平成24年1月推計の解説および参考推計(条件付推計)—』2012, Retrieved from <http://www.ipss.go.jp/syoushika/tohkei/newest04/kaisetsu.pdf>

- (18) 文部科学省『教員勤務実態調査（H28）（追加集計分）』文部科学省, 2017b
- (19) 小学校・中学校の学級担任の平均値を抽出した。
- (20) 前掲
- (21) 前掲
- (22) 文部科学省『教員をめぐる現状』文部科学省, 2006
- (23) 前掲
- (24) 宇都宮徹「過去最高の就活「売り手市場」は来年も続く？-業績悪化でも企業が採用を絞らないワケ」『東洋経済オンライン』2016, Retrieved from <https://toyokeizai.net/articles/-/119847>
- (25) 文部科学省『平成 29 年度大学等卒業者の就職状況調査（4 月 1 日現在）』文部科学省, 2018b
- (26) 久保順也「初等教育教員養成課程における学生の教職意識の形成プロセスに関する縦断的研究（1）」『宮城教育大学紀要』44, 2009, pp. 217-226
- (27) 中林恭子・後藤多知子・舘英津子・渡辺千津子「養護教諭志望学生が進路を変更するプロセスについて」『瀬木学園紀要』10, 2016, pp. 41-48
- (28) 三上彩・伏見葉月・関由起子「教員を目指す女子学生の進路選択に至る過程」『埼玉大学紀要, 教育学部』62(2), 2015, pp. 177-188
- (29) 本調査参加者の当該年度英文科教職課程履修者全体に対する割合は 90%であった。なお、本論文では、個人的な経験を語ったインタビュー・データを掲載している。回答者個人が特定化されないよう、調査がおこなわれた年度ならびにインタビューを受けた学生の人数の公表は差し控える。
- (30) 学校教育センターの制度。教職課程に関する説明会への無断欠席や提出物の遅延などがあれば、当該年度の課程履修申込みや実習ができなくなる。
- (31) インタビューを受けた人数については前掲。
- (32) 西條剛央『ライブ講義 質的研究とは何か』新曜社, 2007
- (33) 竹内理・水本篤『外国語教育研究ハンドブック』松柏社, 2014
- (34) 川喜田二郎『続・発想法—KJ 法の展開と応用』中公新書, 1970
- (35) 今津考次郎「教師の職業的社会化（1）」『三重大学教育学部研究紀要・教育科学』30(4), 1979, pp. 17-24
- (36) 姫野完治『学び続ける教師の養成』大阪大学出版, 2013
- (37) 本調査対象の英文科学生は、1 年次 2 月から 2 年次 5 月末まで 4 ヶ月のアメリカ留学を経験する。本調査は帰国直後の 6 月におこなわれた。
- (38) KH Coder については <http://khcoder.net/> を参照。
- (39) KWIC (Key Words In Context) は、キーワードの前後に共起する文字列の傾向を分析するのに有効な表示形式。
- (40) 英文科では 2017 年度に「教職支援委員会」を立ち上げ、教職課程履修者に対するガイダンスや教員採用試験を受験する英文科学生に対する指導をおこなっている。